

死に逝く人とのコミュニケーションを実演する ——ディネ先住民チャーニーの死に方を学ぶ——

■ヘヤー・インディアン (Dene, ディネ) : Hare Indian

"The Dene people (/ˈdɛneɪ/ DEN-ay) (Dené) are an aboriginal group of First Nations who inhabit the northern boreal and Arctic regions of Canada. The Dené speak Northern Athabaskan languages. Dene is the common Athabaskan word for "people" (Sapir 1915, p. 558)."

- Wiki <https://en.wikipedia.org/wiki/Dene>

1. Yellowknives Dene First Nation (they identify as Weledeh Yellowknives Dene, aka Inconnu River People): many are descendants of the Wuledehot'in regional group of the neighboring Tłı̨chǫ. Communities: Dettah, N'dilo, and Yellowknife. Population: 1.408. The Dettah-Ndilo-Tłı̨chǫ Yatıı (dialect spoken in the communities of Dettah and N'Dilo developed from intermarriage between Yellowknives and Tłı̨chǫ peoples)

2. Deninu K'ue First Nation (Deninu Kue (pronounced "Deneh-noo-kweh"), means "moose island"). It is a "settlement corporation" in the South Slave Region of the Northwest Territories, Canada. The community is situated at the mouth of the Slave River, on the shore of Great Slave Lake), Deninu K'ue or Dene Nu Kwen are/were called all Chipewyan (Denesuline) and Yellowknives, which came to Fort Resolution for trading their furs, reserve: Fort Resolution Settlement, Population: 843)

3. Lutsel K'e Dene First Nation (Lutselk'e (pronounced "Loot-sel-kay") also spelled Lutsel K'e ("place of the Lutsel", a type of small fish), is a "designated authority" in the South Slave Region of the Northwest Territories, Canada. The community is located on the south shore near the eastern end of Great Slave Lake and until 1 July 1992, it was known as Snowdrift. The First Nation was formerly known as Snowdrift Band. The most northerly Chipewyan First Nation, once nomadic caribou hunters, this band included some Chipewyan and Yellowknives who settled permanently at the trading post established in 1925 by the Hudson's Bay Company near today's Lutsel K'e. In 1954 they moved to the community of Lutsel K'e. Main languages in the community are Chipewyan and English at reserve: Snowdrift Settlement, Population: 725)

<https://en.wikipedia.org/wiki/Yellowknives>



Yellowknife chief Akaitcho and his only son, by Robert Hood, 1821

・(原ひろ子(1989:365)の報告によると、火傷したヘヤー・インディアンの生存率は、白人の10分の1~20分の1だという。1961年に病院関係者に調べたときに、医療関係者は「生への執着を簡単に棄てる」との見解を述べている。彼女の解説はこうだ:「ヘヤー・インディアンは、自分の守護霊が「生きよ」といつている間は、生への意志を棄てない。しかし、守護霊が「お前はもう死ぬぞ」というと、あっさりと生への執着を棄ててしまう。そして良い死に顔で死ぬるようにと守護霊に助けを求め、まわりの人間にすぎるのである」(原 1989:366)。

■ヘヤー・インディアン「チャーニー」の死に方(死期を悟って死ぬまで/人類学者の直接観察)

「私がキャンプ生活に入ってからかなりの日数がたち、ヘヤー・インディアンの方から「ヒロコは薪も割るし、ウサギもとる。歩くのも速い。インディアンの夢や幽霊の話もわかるぞ。インディアンになってきたなあ」と言ってくれるようになってきた。そんな一九六二年八月末のある日、五歳の女の子「マーサ」が、私のテントに真面目な顔をして入ってきた。いつもなら、するりと私のテントに入り込み、しばらく黙って坐って後、朝から何も食べていないとか、まだ飴はあるかなどと言って、茶目気たっぷりな目つきをするのだが、その日は様子がちがった。世にも大事な任務を帯びている風情で、堂々とテントのフラップを開け、日記をつけていた私のまん前に仁王立ちになって、「オジさんが死ぬことにしたから、すぐ行ってあげて。たくさん集まってるよ」と言う。/一週間前、大きなムースを鉄砲で射とめた「チャーニー」は、50歳の名ハンターだ。五日前に風邪をひいたのか、熱があると言って救護所の看護婦のところへアスピリンとビタミン剤を自分でもらいに行った。「安静にして熱いお茶をたくさん飲みなさいって言うておいたのよ。抗生物質も出しておいたから、すぐ治るでしょ」と看護婦は言っていたが、肺炎になったのかも知れない。迎えに来たマーサに、私は「チャーニーは、いつからそう言い出したの」と聞いてみた。「昨日の夕方、夢から醒めてから。だから遠くのキャンプに、お兄さんたちは報せに行ったよ。明日の夕方には皆集まれるって。そしたら、オジさんの話を聞くんだ」と言う」(原 1989:366-367)。

「私は朝食に使った食器を洗い、テントを整頓してから、マーサと一緒にチャーニーのテントへと出かけた。マーサはチャーニーの弟の娘で、チャーニーに可愛がられていた。チャーニーは一昨日から食物を少ししかとらなくなり、死ぬと言いだしてから、紅茶を時折口に含むだけになったという。たたみ六畳くらいのテントには、すでに一七~八人集まっていた。たばこの煙の立ちこめるなか、全員チャーニーの話を聞いている。横臥してボソボソと思ひ出話をつづけるチャーニーに、みんなはフム、フムと相槌を打っている。ふだんの冬の夜長の体験談を聞くときには、聞き手は「フム、フム、それから?」とつづきを催促したり、ときには冗談を言うて話をまぜ返すのだが、死にゆく人には、本人が言いたいことだけを話してもらうために、「それから」と聞いてはいけないことになっている。/チャーニー氏は時折、話を止めて、大きく息をし、紅茶を一口すすっては、目を閉じる。まわりの者は互いに身をすり寄せ合っては、チャーニーを見つめる」(原 1989:367)。

「以前にも述べたように、ヘヤー・インディアンの考え方によると、**霊魂**は肉体を出たり入ったりする。目は開いていても、ボーッとあらぬ方向を見つめたりするときや眠っているとき、

靈魂は肉体をはなれて旅をする。靈魂が旅をして体験することが夢である。夢のなかで、そのときそのときの行動の指針を得るのである。人が目を閉じ、静止するとき、その人は自分の守護靈と交信するのだから、誰もそれを乱してはいけない。その人が目を開け、再びまわりの者と話しはじめるまで待つのである。チャーニーが昨夕、夢から醒めてから自分は死ぬと言いだしたのは、守護靈のお告げがあったからだ。また今日思い出話をしていて、途中で目を閉じ、沈黙するときも、守護靈と交信しているのだと人々は信じている。／肉体が生きているとき、靈魂は再び肉体に戻ってくるが、死ぬと靈魂が出て行ったきり戻ってこなくなる。だから、チャーニーが話を休めると、まわりの者は互いに身をすり寄せ合っては、チャーニーが良い死に顔で死ぬようにと祈るのである。人が死ぬと、その靈魂は、自分のミウチ (=身内) や生前のキャンプ仲間のもとや、自分が一生の間に旅をしキャンプをして泊ったところを巡り歩くという。遺体が埋葬されると、あの世への旅をはじめ。そして、良い死に顔をして死んだ者の靈魂は、再びこの世に生まれるべく旅につく。そして埋葬前にも、悪い死に顔の人ほどには、この世の近い人の靈を道連れにしようと思いつきまとわない。だから、良い死に顔で死ぬことは、死にゆく本人の願いでもあり、見送る人々の願いでもある」 (原 1989:368)。

「チャーニーと一緒にキャンプしたこともなく、猟に出かけたりしたことのない人々は、テントの中に入ってこないが、時折やってきては、テントの外に薪を運んできたり、水をバケツに混んできてくれたりする。またテントの中でみとっている者も、ときには外に出てテントの支柱の杭を打ち直したり、薪を割ったりする。／白人の看護婦は、「あんなに軽い風邪で、あんなに丈夫な人が死ぬ気になってしまったなんて」と、たいへん残念がっている。ヘヤー・インディアンたちは、もう駄目だと悟る時期をどう決めるのか。西欧医学の立場から治療が可能であるかどうかとか、あと何年しか生命をもちこたえられないのではないかといったことは関係なく、それぞれの文化が何らかの基準をもっていたり、それぞれの個人が悟ったりすることは、ヘヤー・インディアンだけに見られる例ではないだろう」 (原 1989:368-369)。

※【池田コメント】レヴィ=ストロースのブドゥ・デス

「次の日に入ると、遠くのあちこちのキャンプ地から、チャーニーの近親や親友たちが報せを受けて駆けつけてきた。夕方、チャーニーは自分の愛用の銃二挺、モーター・ボート、金属製罌、テント、ストーブ、ラジオ、犬などを贈る相手を指名した。20世紀に入る前、そして一部では1920年代までは、銃を用いず手製の弓矢で狩猟し、毛皮を剥ぎ合わせたテントに住んでいたが、その時代には、死者の衣類、テント、生産用具、その他の所有物はすべて焼かれた。このような品物には死者の靈魂がのり移りやすいと信じられ、畏れられたからである。狩猟地は部族全体の共有なので、土地相続の問題はヘヤーの文化には存在していない。しかし、銃やラジオなど、運賃がかかって法外に高い品物が日常生活に入ってきてから、死を前にした新しい儀式がヘヤー・インディアンの生活に導入された。これにのっとなってチャーニーも自分の持ち物を近い人々に贈ったのである。そしてカソリックの神父さんを招いて聖油の秘蹟 (extreme unction) を受けた。／そしてその次の日の未明、チャーニーは息をひきとった。良い死に顔をして。／すると、チャーニーのテントに詰めていた人々は、それぞれ自分のテントに戻ったり、近くに新しくテントを張ったりして、眠らずに身を寄せ合う。チャーニーの肉体を離れた靈魂が道連れにしようとするのを防ぐためだ。そして、縁遠かった人々が、あるいは遺体を守り、あるいは食事や薪を遺族たちに配ってまわる。夕方にはチャーニーにとって

もっとも縁遠い四人の男が遺体を教会堂に運び、ミサの後に埋葬に当たった。参列者が全員で土をかけてあげた」(原 1989:369)。

※【池田コメント】チャーニーが死期を悟り、ある意味でみんなが期待するタイミングにあわせて逝くのは、ある意味で「死者になる人の能力」ということもできる。瀕死のものは死者になってもまた、そのようなポテンシャルをもっている。なぜなら、生きている者たちは、見寄せて靈魂が道連れにされないように「予防行動」をとるからである。

文献：原ひろ子(ヒロコ)『ヘヤー・インディアンとその世界』平凡社，1989年(2枚のモノクロ写真は、原(1989)による)

《課題》：5～6人のグループワーク

1. チャーニーとコミュニティの人たちの関係について考えてみよう
2. チャーニーの逝き方を通して、ディネの典型的な老人の逝き方について、想像をしてみよう。その際に、チャーニー、ヒロコ、マーサ、神父さん、邑(むら)の人、人の気持ちがどのようなものであるかを想像すること。
3. チャーニー、ヒロコ、マーサ、看護婦、神父さん、邑(むら)の人、(靈魂)を、それぞれ演じわけて、彼らの身体表現(身のこなし方)を想像しながら演じてみよう。
4. 演じた後に、みんな気持ちが演じる前と後でどのように変化したのか、演じるさいにどのような「身体技法」に気をつけて演じたのかについて、話し合ってみよう。

